

第2回〈ケア〉を考える会-岡山

「〈ケア〉を考える会-岡山」第2回を開催します。

第1回は、7月21日に開かれ、懇親会だけの参加者を含めて10名が集まりました。時間が過ぎるのを忘れてしまうぐらい熱のこもった話し合いが続いたのです。

参加者の声です。——「本から学ぶ」というより、本を糸口に、みなさんから学ばせていただく時間になりました。できれば、今後もあのような濃密な時間を過ごしたいと希望しています。(松川)

——久しぶりに若い方と討論出来て勉強になりました。とても楽しかったです。刺激を受けました。有難うございました。(菊井)

——議論を深めあうことができ、たいへん爽り多い時間を過ごさせていただきました。(田中)

第2回は「死」が主なテーマです。

専門も、職種も、年齢も、立場も、考えもそれぞれ異なる人たちが集まり、時と場を共にします。わくわくしてきます。

どなたでも参加できます。気軽に覗いてみてください。

■日時：9月29日(日) 14:00~16:00

■会場：川崎医療福祉大学 本館 6階 6001 演習室 (定員 35名)

<http://www.kawasaki-m.ac.jp/mw/access/index.php>

※建物の1階(防災センター)から備え付けのスリッパに履き替えてお上がり下さい。

エレベーターで6階へ行きますと、降りた正面に案内標識があります。

駐車場を利用の場合は、福祉大学の職員・学生駐車場(病院とは道をはさんで反対側)をご利用ください。1時間100円です。

■会費：無料

■内容：課題図書……清水哲郎『最期まで自分らしく生きるために』(NHK出版)。今回は「身体の死-別れとしての死」と「死者を想う」(19~44頁)です。

読んで、思うこと・考えること、また、そこから連想・想起・発想する諸々について、語り合います。

※この本は、2012年7~9月NHKラジオ「こころをよむ」シリーズで放送されたもののテキストです。

■懇親会……終了後に、会場近くの居酒屋で懇親会を開きます(希望者)

■呼びかけ人

大賀由花(赤磐医師会病院/透析療法指導看護師)

河合清志(社会福祉士)、

小林真美

清水昭雄(管理栄養士)

田中順子(川崎医療福祉大学リハビリテーション学科/作業療法士)

林道也(社会福祉士)

平松邦夫(社会福祉士)

松川絵里(カフェフィロ副代表/大阪大学 CSCD 特任研究員)

山本広美(社会福祉士)

■参加申し込み・問い合わせ

884michiya@gmail.com 090-5366-1497(林)



備中高松城址公園にて

会の趣旨

▼岡山(倉敷)で、〈ケア〉について学び考える会を開催します。

〈ケア〉といえば、「看護」「介護」「支援」「世話」などが先ず頭に浮かびます。超高齢社会を生きる私たちにとって、切実な課題の一つです。

そして、〈ケア〉は、もっと広くとらえることもできます。たとえば広井良典氏は、ケアを「(人と人との)関係性」(人と人との「つながり」)として考えます。さらに、個人個人のつながりから、そのケアの深まりとして個人がコミュニティや自然やスピリチュアリティとつながって「一体化」していくような方向でもケアを捉えていきます。そのうえで、「関係としてのケア」の「進化」として「ケアとしての科学」を唱えます。「『ケアの哲学』とでもいうようなものが必要」とも言います。この会では〈ケア〉について、身近なところから理念的なものまで、そして、狭い意味から広い意味まで、幅広く考えていきます。

▼この会の参加者は、医療・看護・介護・福祉・教育などの現場、または地域や家庭などで〈ケア〉に関わっている方、大学や学校で〈ケア〉の教育・研究に携わる方や学んでいる方、さらに、その他、〈ケア〉に関心や関係のある方などです。

〈ケア〉に関わる人たちが学び交流することで、明日からの力を得る〈場〉となることを願います。

▼会では、課題図書を読んだり、または、人の話を聞いたりして、語りあいます。

そして、会の後には、会場近くの居酒屋で懇親会を開きます(希望者)。

学び、語り合い、そして、食べ、飲み、さらに、語り合う。

この会は参加者の「つながり」を大切にします。

最期まで 自分らしく 生きるために

清水哲郎
Shimizu Tetsuro

2012年
7月~9月

インターネットで
番組が聴けます!

NNKネットラジオ
らじる★らじる



身体の死

― 別れとしての死

第一回では、私たちは「生」について考え、人のいのちについての生物学的な生命と物語られるいのちという二重の視線を提示しました。身体として私が生きていることと、物語られるいのちの主体である私が次にすることを選択しながら前に向かって生きていくことは、同じことについて、それぞれの別の側面に焦点をあてる言葉です。

また、前回の最後には人の死についても、医師が身体の生命活動を観察して死を判断する身体的な死と、死にゆく者と親しい人々が交流できなくなる「別れ」としての人の死とがあることを見ました。さらにそれぞれが、生物学的生命の終わりである死と、物語られるいのちの終わりである死に対応していることを指摘しました。第二回はこの続きから考えます。

第二回

7月8日① 放送
7月15日②再放送

死者を想う

身体の死―人の死という二重の死は、生物学的な生命と物語られるいのちという二重性に対応していることを私たちは見てきました。人は死んだらどうなるのか? という問いへの答えも、身体に定位して考えるか、人と人との関係において起きる別れとしての死に定位して考えるか、またこの二つの異なる考えを同時に持つということもあり得ることを示しました。そうした死の理解を基本にして、第三回は遺される側の者が親しい人を失うという喪失の問題を取り上げます。

第三回

7月15日① 放送
7月22日②再放送

